

第二十回 上田城跡能鑑賞の手引き

能を鑑賞しても、何を言っているのか聞き取れない、また内容がよく解らないとの声が聞かれます。そんなことで、昨年はプログラムに詞章を載せましたが、今年には事前に学習して頂く為に、この手引きを作成しました、十分な内容ではありませんが、参考にして下さい。

イ、原文は宝生流謡本を使用しました。ワキの詞章は若干異なる場合があります。口、上段に原文を下段に詞章一部の意味を簡単に記しました。

ハ、ふりがなは実際に能(謡曲)で発声する音で、ふりがなをつけました。

例 竹生島の「竹に生る、」は「竹に生る、」となり

「君に御暇を申し」は「君に御暇を申し」となります。

ニ、謡の部分は冒頭にひを、詞(せりふ)は「をそれぞれ冠しました。

参考文献 宝生流謡曲大成 日本古典文学全集の謡曲集



竹生島

鵜能

季 春 所 近江国竹生島 (滋賀県琵琶湖に浮かぶ島)

シ テ 漁翁(鵜をうけ、小舟の面をかける。小格子厚板を着付けに着、上に水衣を着て、腰帯をしめる。持物は扇、櫓)
 後 シ テ 龍神(赤須うけ、龍台をいただき、黒塗の面をかける。厚板を着付けに着、半切をはき、上に袷法被を着、腰帯をしめる。持物は打杖、珠)
 ツ レ 女(髪をつけ、腰帯をしめ、小面の面をかける。摺籠を着付けに着、上に色入唐織を着る。持物は釣箱)
 後 ツ レ 弁才天(黒髪をうけ、天冠をいただき、小面の面をかける。摺籠を着付けに着、白大口をはき、腰帯をしめる。持物は扇)
 ワ キ 臣下(大島帽子をいただき厚板を着付けに着、白大口をはき、上に袷法被を着て、腰帯をしめる。持物は扇)
 ワ キ ツ レ 従者(ワキと同じ装束を着る。)

〔後見が一疊台を大小前に置き、その上に宮を置く〕
 〔次第の囃子にてワキ・ワキツレ登場〕

ワキ「竹に生る、鶯の。竹に生る、鶯の竹生島詣で急がん
 「抑是は延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても

延喜一醍醐天皇の年号
 聖代一聖天子の御代

江州竹生島の辨財天な。霊神にて御座候間。此度君に御暇を申し。唯今竹生島に参詣仕り候
 四の宮や河原の宮居末はやき。河原の宮居末はやき。名も走井の水乃月。曇らぬ御代に逢坂の関の宮居を伏し拜み。山越え近き志賀の里。鳩の浦にも着きにけり鳩の浦にも着きにけり
 (一)セいの囃子でシテ登場し、アシライの囃子で舞台に入る

弁才天一音楽、身舌、財福、知る七福神の一
 霊神一霊験著しい神

鳩の浦一琵琶湖畔、琵琶湖の古の海という

シテ「面白や頃は弥生の半なれば。波もうららに海の面
 ツレ「霞み渡れる朝ぼらけ
 シテ「長閑に通ふ舟の道。うき業となき心かな
 シテ「これは此浦里に住み馴れて。明け暮れ運ぶうろくづの

シテ「数を盡くして身ひとつを。助けやすると他人の。隙も波間に明け暮れて。世を渡ること。物うけれ

「よしよし同じ業ながら世にこえたりな此海の

「名所多き数々に

「名所多き数々に

ツレ「うら山かけて眺むれば。志賀の都花園むかしながらの山桜。真野の入江の船呼ばひ。いざ漕ぎ寄せて言問わん

「いかにかこれなる舟に便船申さうなう

シテ「これは山田矢橋の渡船にてもなし。御覧候へ海士の釣舟にて候程に。便船はかない候まじ

ワキ「こなたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に始めて参詣の者なり

ワキ「誓ひの舟に乗るべきなり

シテ「げにげに此島は霊地にて。歩みを選び給ふ人を。いなと申さば御心にも違ひ。又は神慮も計りがたし

シテ「さらばお舟を参らせん

ワキ「嬉しやさては誓いの舟。法の力と覚えたり

ツレ「今日は殊更長閑にて。心にかゝる風もなし

船呼ばひ一船を呼び寄せること
 その声

助けやする一生活する
 他人一貧しく世を渡る人
 物うけれ一情なく辛い心情

世にこえたり一琵琶湖は名所が
 他に優れてよい所と

便船一折よく来た船に、ついで
 りすること

山田矢橋一共に大津に通う渡船

誓ひの船一私が衆生を悟りに導く
 する誓いを、人を彼岸に導く
 とえていう語

霊地一神社仏閣がある尊い地
 御心一参詣人の志

法の力一舟に乗りと掛詞。仏法

い名こそさゞ波や志賀の浦にお立ちあるは都人か痛
わしや。お舟に召されて浦々を眺め給へや

い所は海の上。所は海の上。国は近江の江に近き・
山々の春なれや花はさながら白雪の。ふるか残る
か時知らぬ。山は都の富士なれや。猶さえかへる
春の日に。比良の嶺おろし吹くとても。沖漕ぐ舟
はよもつきじ。株のならひの思わずも。雲居の餘
所に見し人も。同じ舟になれ衣うらを隔て、行く
程に。竹生島も見えたりや

い緑樹影沈んで
い魚木に上る景色あり。月海上に浮んでは兎も波を
走るか面白の浦の景色や
い船が着いて候御上り候へ
い心得申し候

い竹生島へ御参り候はば御道しるべ申し候べし
「あら嬉しやさらば御供申そうずるにて候
「此方へ御入り候へ。これこそ竹生島の辨財天にて
候へよくよく御拝み候へ
「承り及びたるよりもいやまさりて有難う候。ふし
ぎやな此島は。女人禁制とこそ承つて候に。あれ
なる女人な何とて参られて候ぞ
「仰せはさる事にて候へども。忝くも九生如来の虚
空再誕にして。しかも廣大無辺なれば。殊更女人
こそ参るべけれ

いなうそれまでもなきものを
い辨財天は女体にて。辨財天は女体にて。其神徳も
あらたなる。天女と現じおわしませば女人とて隔
てなし唯知らぬ人の言葉なり
いかゝる悲願を起して。正覺年久し。獅子通王の古
へより利生更に怠らず
いげにげにかほど疑いの
いあら磯島の松影を便りに寄する海士小舟。我は人

ふるか残るか新雪か残雪か。白い山
桜が雪のようだ
時知らぬ山一年中雪のある山のこと。
富士山の別名
都の富士雪の比叡山をこの様によんだ
比良の根おろし毘叡湖岸の比良山か
から吹き下ろす強い風
雲居の余所に見し人全く緑のない人
なれ衣馴れ親しむ

緑樹影沈んで木々の緑の影が湖面に
に映り、湖底に沈んでいる
魚木に上る湖水中に泳ぐ魚が木々に登
るような
月海上に浮かぶ月が湖面に影を映す
兎も波を走る一月の中の兎も波の上を
走るとうな

御道しるべ申し案内をする
さる事にてもつともなご
九生如来大日如来?
虚空再誕虚空(空中)からこの世に
生まれ変わる事
廣大無辺如来の慈悲が広く行き渡る
こと

正覺年久し真の悟りを得てから年久
しいこと
獅子通王弁才天の過去仏?
利生衆生に利益を与えること
あら磯島竹生島をさす

間にあらずとて。社壇の。扉を押し開き。御殿に
〔ツレ宮の作り物に中入り〕
入らせ給ひければ。翁も水中に入ると見しが白
波の立ち帰る我は此海の。主ぞと言ひ捨て、又波
に入らせ給ひけり
〔シテ中入り後、間狂言〕
い御殿しきりに鳴動して。日月光かかやきて。山の
端出づる如くにて。現れ給ふぞかたじけなき
〔宮の引廻しを下すと後ツレが床几かけた姿で現れる〕

地
い其時虚空に音楽聞え。其時虚空に音楽聞え。花ふ
り下る春の夜の。月にかかやく乙女の袂。返すが
へすも。おもしろや
〔天女の舞を舞う〕
地
い夜遊の舞楽も時過ぎて。夜遊の舞楽も時過ぎて。月
澄み渡る海づらに。波風頻りに鳴動して下界の龍
神現れたり
〔後シテ、早笛の囀りにて一の松辺りに出る〕
地
い龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光も
かかやく金銀珠玉を彼のまれ人に。捧ぐる気色有
難かりける。奇特かな
〔シテはハタラク(豪快勇壯な舞)を舞う〕
後シテいもとより衆生済度の誓ひ
地
いもとより衆生済度の誓ひ。様々なれば。或は天女
の形を現じ。有縁の衆生の諸願をかなへ。または
下界の龍神となつて。国土を鎮め。誓ひを現し天
女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなわち湖水に
飛行して。波を蹴立て。水をかへして天地にむら
がる大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に
飛んでぞ。入りにける
〔シテは留拍子を踏む〕

我は此海の主毘叡湖の主。即ち龍神
日月光かかやきて弁才天が光に包ま
れて現れた有縁
胎藏界一密教で説く二つの世界の一。
金剛界に対して、大日如来の理性の
面をいう
虚空に音楽聞え(大空に妙なる音
楽が聞え花が降るのは天女が来迎す
る。目出度いことが起る前兆である
返すがへす袂をかえすと掛詞。重
ねがさねの意

彼のまれ人まれ人は客、即ち臣下
様々なれば一誓願の方便は色々である。
ある時は天女に、またある時は龍神
になるが、共に弁才天の變化身である
有縁の衆生に仏に縁ある、仏道を信じ
る者

龍神神力ある鬼神で雨水を司り、仏
法の守護神とされる。漁夫は海神と
して信仰する

地
い夜遊の舞楽も時過ぎて。夜遊の舞楽も時過ぎて。月
澄み渡る海づらに。波風頻りに鳴動して下界の龍
神現れたり
〔後シテ、早笛の囀りにて一の松辺りに出る〕
地
い龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光も
かかやく金銀珠玉を彼のまれ人に。捧ぐる気色有
難かりける。奇特かな
〔シテはハタラク(豪快勇壯な舞)を舞う〕
後シテいもとより衆生済度の誓ひ
地
いもとより衆生済度の誓ひ。様々なれば。或は天女
の形を現じ。有縁の衆生の諸願をかなへ。または
下界の龍神となつて。国土を鎮め。誓ひを現し天
女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなわち湖水に
飛行して。波を蹴立て。水をかへして天地にむら
がる大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に
飛んでぞ。入りにける
〔シテは留拍子を踏む〕

間にあらずとて。社壇の。扉を押し開き。御殿に
〔ツレ宮の作り物に中入り〕
入らせ給ひければ。翁も水中に入ると見しが白
波の立ち帰る我は此海の。主ぞと言ひ捨て、又波
に入らせ給ひけり
〔シテ中入り後、間狂言〕
い御殿しきりに鳴動して。日月光かかやきて。山の
端出づる如くにて。現れ給ふぞかたじけなき
〔宮の引廻しを下すと後ツレが床几かけた姿で現れる〕

地
い其時虚空に音楽聞え。其時虚空に音楽聞え。花ふ
り下る春の夜の。月にかかやく乙女の袂。返すが
へすも。おもしろや
〔天女の舞を舞う〕
地
い夜遊の舞楽も時過ぎて。夜遊の舞楽も時過ぎて。月
澄み渡る海づらに。波風頻りに鳴動して下界の龍
神現れたり
〔後シテ、早笛の囀りにて一の松辺りに出る〕
地
い龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光も
かかやく金銀珠玉を彼のまれ人に。捧ぐる気色有
難かりける。奇特かな
〔シテはハタラク(豪快勇壯な舞)を舞う〕
後シテいもとより衆生済度の誓ひ
地
いもとより衆生済度の誓ひ。様々なれば。或は天女
の形を現じ。有縁の衆生の諸願をかなへ。または
下界の龍神となつて。国土を鎮め。誓ひを現し天
女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなわち湖水に
飛行して。波を蹴立て。水をかへして天地にむら
がる大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に
飛んでぞ。入りにける
〔シテは留拍子を踏む〕